

第5節 久宝寺遺跡出土の青銅製品

(財)大阪文化財センター 三好孝一

はじめに

久宝寺遺跡南地区第1調査区より二点の青銅製品が出土している。いずれも弥生時代中期の遺構に伴って出土したものであり、C地区の例は方形周溝墓の主体部埋土中より出土したもの、また、D地区出土の青銅製品は、特殊な性格を有すると考えられる土坑より出土した例で、大阪湾型銅戈を転用し、欠損部を研磨することにより刃部を作り出すという極めて特異なものである。これまで埋納遺構出土、あるいは採集された資料が多い中で、確実に土器などの遺物とともに共伴し出土した資料として注目に値するものと言えよう。

ここでは、これらの資料の観察を中心に
してのべることにし、あわせてこれまで出
土した大阪湾型銅戈と比較した場合の位置
づけについてものべることにしたい。

出土青銅製品

青銅製品のうち、C地区のものは1号方
形周溝墓2号主体部内の埋土中より出土し
たものであるが主体部に伴うものかどうか
は明らかではない。

厚さ1.5mm弱の偏平な青銅板の一边を鑿
状の工具により敲打することにより切断し
たもので、切断された方向にゆくに従い薄
さは増す。他の三辺は成形時のままでおわ
り、わずかに切断された反対側の長辺の稜
部の一部分にのみ研磨あるいは敲打によっ
て生じたと考えられる平滑な線状の面が形
成されている。

表裏面には縦位の細い凹凸がみられ、色
調は緑灰色を呈しているが、新鮮な破損面
には純銅のような光沢が観察される。表面
観察のみでは鬆や鑄損じのような鑄造の際
に生じる様相は見られないが、鑄造品の鑄

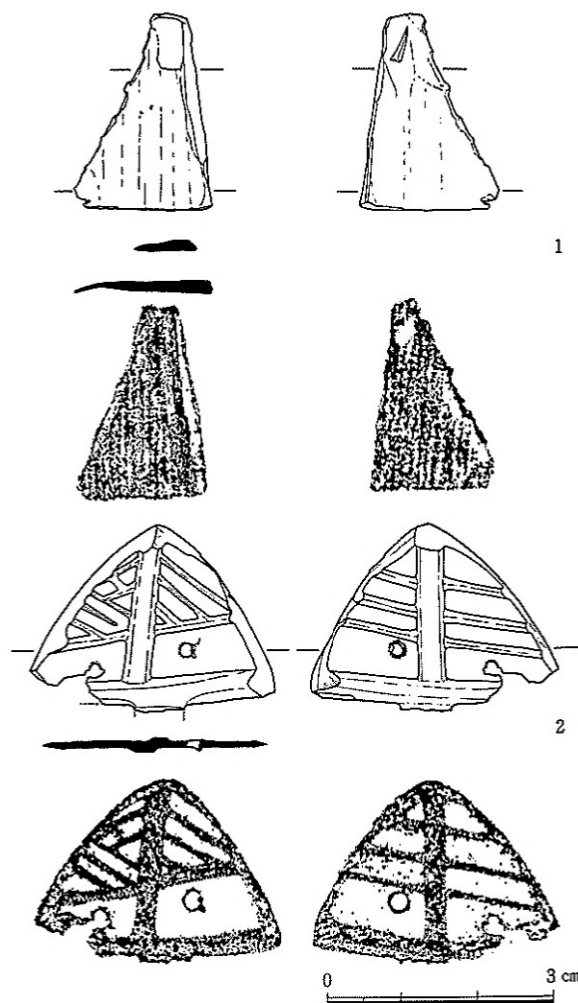


図1 久宝寺遺跡出土青銅製品

バリを切り落とした切片とも考えられる。

もう一点は、D地区の東方橋脚部分拡張トレンチであるD-2地区の土坑-15から出土したものである。二等辺三角形状を呈する偏平な青銅製品の二側縁を両面より研ぎ出すことにより刃部を形づくるもので、その用途は明確にはし難いが、形態からみて銅鏃になるかもしれない。

研磨が施されない下方の一辺がやや傾斜を持つこと、中央部の突線を介して双方に円穴を穿つこと、表と裏面に平行線と複合鋸歯紋を陽出した部分が残存していることから、所謂大阪湾型銅戈の範疇に含まれる青銅製利器を転用して制作されたものと考えられる。

大阪湾型銅戈として考えて見てゆくならば、右側の紐掛穴は鑄造後裏面より穿孔し直され、左側の紐穴は湯まわりが悪く後補の穿孔が行われているのか明確には出来ない。

残存部のみをみた場合鋳掛けなどの補修は認められず鑄放しのままである。茎は関部で幅7mmをはかり、それ以下は欠損し痕跡を止めるにすぎない。下端部は鋳バリを切除したのち面取が施されている。樋の部分には中央部と下端部に突線を陽出し、その両側には複合鋸歯紋が施されている等の特徴を見出すことができる。

また、この大阪湾型銅戈のもう一つの大きな特徴は、表裏とも各々紋様の違う鋳范により製作されたもので、表側の紋様は横線で区画した後直ちに複合鋸歯紋を配するのに対し、裏面では通常見られるような平行線を鋳出した後、複合鋸歯紋を配する紋様構成をもつと見られることである。

表面は暗緑灰色を呈する部分と藍色及び鉄分の沈着したと思われる褐色の部分が見られ、また、鬆が何箇所も見られる。

大阪湾型銅戈の類例

ここでは、これまでに出土した大阪湾型銅戈の集成と比較を行ってみたい。現在までに出土した大阪湾型銅戈の類例は今回の出土例を含めて、兵庫県2遺跡8例、大阪府3遺跡3例、和歌山県1遺跡6例の計6遺跡17例である(表-1)。

多くは埋納品を不時発見したもの、あるいは採集品であり出土状況の明確なものは少ない。また、一括埋納された例が2遺跡13例をかぞえる。

これらの例を最も古いとされる和歌山県有田市箕島町上ノ段遺跡出土例をa類、兵庫県神戸市灘区桜ヶ丘遺跡出土例をb類、兵庫県東灘区本山町保久良神社出土例をc類とする従来の型式分類¹⁾にあてはめてみるならば、上記の出土例の他、大阪府高槻市大塚町大塚遺跡出土例²⁾はb類、大阪府東大阪市若江西新町瓜生堂遺跡出土例³⁾はc類にあてはめられるとされ、今回の久宝寺遺跡出土例も詳細は不明ながらもc類に該当すると考えられる。

これらのうち、鋳型から取り出した製品の紐掛穴部分に対して円孔を穿つという製作技法からみて久宝寺遺跡出土例は、瓜生堂遺跡出土例に最も近似していると考えられる。

このほかに製品ではないが、大阪府茨木市奈良町東奈良遺跡より大阪湾型銅戈b類の土製鋳范⁴⁾が出土している(表2)。

表1 大阪湾型銅戈出土地一覧

No	府県名	遺 跡 名	遺 構	伴 出 品	型式	時 期	備 考
1	兵 庫	桜ヶ丘遺跡	埋納坑	銅鐸14 外縁付鈕式 4 扁平鈕式 10	b		
2					b		
3					b		
4					b		
5					b		
6					b		
7					b		
8		保久良神社	包含層	土器・石器	c	中期中葉～後期	
9	大 阪	大塚遺跡			b		採集品
10	大 阪	瓜生堂遺跡	自然河川		c	中期後半	
11	大 阪	久宝寺遺跡	土坑	土器・モミ	c	中期末	
12	和歌山	上ノ段遺跡		付近より銅鐸が 出土	a		
13					a		
14					a		
15					a		
16					a		
17					a		

表2 大阪湾型銅戈鎔范出土地一覧

A	大阪	東奈良遺跡	包含層	銅戈鎔范3 銅鐸鎔范15 外縁付鈕式鎔范3 扁平鈕式鎔范1、 他破片11 勾玉鎔范2	b	中期前半～庄内	
---	----	-------	-----	---	---	---------	--

共伴遺物

以上の類例のうち共伴遺物の存在するものが若干みられる。a類6点がまとまって検出された上ノ段遺跡出土例では、銅戈が出した地点よりやや離れた位置から江戸時代に銅鐸が採集されていることが伝えられている。

桜ヶ丘遺跡出土例b類7点は外縁付鈕式の銅鐸4点、扁平鈕式の銅鐸10点が共伴していることが報告されている。

保久良神社出土例c類は中期中葉から後期の遺物とともに出土している。

瓜生堂遺跡出土例c類は、中期第II遺構面から切り込まれた河川堆積最上層より出土し、同一面より出土した土器ならびに、これらを覆う包含層に対応する土層出土の土器からみて中期後半頃に属する遺物と考えられる。

久宝寺遺跡出土例c類は土坑の埋土中から出土し、共伴した土器より中期末に比定される。この土坑の形状、出土遺物等については本文中に詳しいが、朱彩を施した土器の出土、完形土器の出土、多量の穂首刈りされたままの稲穂が出土していることから、非常に特殊な状況を表していると考えられ、通常一般に土坑とされる遺構とはやや性格を異とし祭祀の様相が強いということが言えよう。

このように見てきた場合、ほとんどの例は後に破損した状態で出土しているか、全形を窺える状態で出土していることに對し、久宝寺遺跡出土例は明らかに転用を受けた二次的製品として出土していることが注意される。すなわち、久宝寺遺跡出土例からみて最も新しい形式とされる大阪湾型銅戈c類は中期末には実戦用ではない青銅器あるいは武器型祭器の機能をすでに失い、銅の素材のみを活かした利器としての転用をうけていることが考えられる。これらの状況より大阪湾型銅戈は中期末には本来の機能を停止し、これらが鋳造された後、一定期間使用された時期もおのずと、中期後半以前に限定できうる可能性が生じてくる。以上のように考えられるならば、これまで単独出土、あるいは共伴遺物が少なく、また、一括埋納という製作されてから埋められる時間的経過が不明瞭であった大阪湾型銅戈が多いなかで、久宝寺遺跡出土例がその本来の目的を持ち製作、使用された時期の終焉を知る上での貴重な資料となることは揺るぎ得ない立場をとることとなる。

まとめにかえて

久宝寺遺跡出土の大阪湾型銅戈に対して、湯まわりが悪い部分に鋳掛けが施されていない部分が存在していることから、鋳造の際の失敗品を他の青銅製利器に転用してしている可能性を完全に払拭することが出来ないが、青銅製品をほとんど本来の原形を止め得ぬまでに再加工し、さらに刃部を形成しているという例を見ない現在、また、鋳造後の紐掛孔部分に瓜生堂遺跡出土例に見られるような補修が施される事実を重視し、完成品として使用された時期が存在したという仮定が許されるならば、以下のことが考えられる。

久宝寺遺跡出土大阪湾型銅戈c類は中期末にはすでにその本来の機能を失っているうえに、さらに別の青銅製利器として転用されていることは先にも述べた。このことは当時の人々が、非常に扁平であり、刃部が研ぎ出されていないことから非実戦用具とされる大阪湾型銅戈c類を取り扱う際、この時期すでにその本来の意義が失われ、銅戈に対する意識が大きく変化してしまっている状況を如実に表していると言える。また、このような状況より大阪湾型銅戈c類が鋳造された年代の下限を土坑より共伴した土器より中期後半以前に限定できるという結果が導き出される。

以上、非常に簡単ではあるが久宝寺遺跡出土の青銅製品2点についての検討を加えた。この内、従来、時期の把握に対し決定の手段を頼る術が乏しかった大阪湾型銅戈が多い中で、久宝寺遺跡より出土した新例は、時期の限定できる遺構内より出土し、かつ転用を受けているという点でその持つ意義は非常に大きいということを述べてまとめにかえたい。

註

1. 三木文雄「大阪湾型銅戈について」『ミュージアム』223 1969年。
2. 迂路行驢子「高槻市大塚町地先の淀川床遺跡出土銅戈 一戈矛類の用例も併せて一」『大阪文化誌』第三巻第二号 財団法人大阪文化財センター 1976年。
3. 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『瓜生堂』近畿自動車路天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980年。
4. 田代克己他「東奈良遺跡出土の銅鐸銘范について」『考古学雑誌』第61巻第1号 1975年。
5. 梅原末治『銅鐸の研究』 1927年。
6. 『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書（本編）』兵庫県教育委員会 1969年。
7. 樋口清之「摂津保久良神社の研究」『史前学雑誌』第11巻第2・3号 1942年。